

<全体分析>

試験時間 90 分

解答形式

記述・計算・選択・論述

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

空欄補充の形式の出題が減少した。

解答に、図を用いてもよいとの形式の出題が久しぶりに見られた。

その他トピックス

○×で解答させる形式の出題が見られた。

<大問分析>

| 番号 | 出題形式 | 出題分野・テーマ | 範囲 | コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど) | 難易度 |
|-----|----------------------|----------------------|----|---|-----|
| I | 記述 計算 選択 | 太陽 | 地学 | 問 3(2)は、丁寧に計算しないと選択しにくい。問 4 のような○×で解答させる形式は珍しい。問 3 以降がどれだけ正解できるかが高得点の鍵になるだろう。 | やや易 |
| II | 論述 選択 計算 | 風 エネルギー収支 | 地学 | 問 2(4)は、緯度 40 度の気圧傾度力を見積もるために、緯度 35 度～45 度の間の高度の差を求めることに気付けるかが正解の鍵となる。問 2(5)は、解答欄の大きさから考えて、低気圧と高気圧の両方を論述すべきである。 | やや難 |
| III | 記述 計算 論述 選択 | 走時曲線 ジオイド 重力異常 | 地学 | 問 2(2)は、直角三角形の辺の長さの比に気付くことができるかどうかで解答時間が変わるだろう。問 3(2)は、解答を組み立てることが難しい。複数の文にしてまとめる方が楽かもしれない。 | 標準 |
| IV | 選択 記述 論述 | 地質図 地史 | 地学 | 問 2(1)は、走向を仮定して X～Z の凝灰岩層の高度と矛盾しないかを考えてもよい。問 4 は、解答欄の大きさから考えて、簡単でも文章の形で答える方がよいだろう。問 5 は確実に得点したい。 | 標準 |

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

京都大学は、論述問題の比率が極めて高い。また、計算問題も多く出題される。解答用紙の解答欄の数を見て、くじけそうになるかもしれない。しかし、解答欄を埋めることを目標とするべきではなく、自分が十分と思う内容を簡潔にまとめることこそ肝要である。また、問題文をよく読み、何を答えるべきかを把握することも重要である。論述や計算の対策に十分な時間をかけるべきであり、時間配分にも注意を払うことが必要である。また、様々な出題形式の問題に備えるためにも、教科書の隅々まで目を通すこと。そして、模試受験や過去問演習を繰り返すべきである。